

# 鳥学ニュース No. 17

1985年6月20日

## トキのニュースを聞きながら

中 川 志 郎

6月1日、出勤途上の携帯ラジオで、残念なニュースを聞いた。今年も佐渡のトキ保護センターにいるペアのトキが、1ヶの卵も産むことなしに繁殖期を終わってしまった、という報道である。3月以来、オスのミドリとメスのキンの間の関係は、今までになく良好で、積極的な巣造りも行われ、交尾もかなり本格的に行われていることを聞いていただけに、どうしようもなく無念であった。

僅か1分ほどの簡単なニュースであったけれど、それは、消え難い余韻となって一日中私の耳の中で鳴りつづけていた。この発表をしなければならない保護センター主任の近辻さんの無念の表情が、私には、手にとるように分っていたからである。

私は、トキ増殖技術検討会の座長として、つい去年の暮れまで、近辻さんたちと一緒に、このプロジェクトにとり組んで来た。1975年11月からほぼ10年にわたる長い年月である。その間、野生のトキたちの繁殖を推進するために行った数々の事業、そして、野生での繁殖をあきらめ、全羽を捕獲して人工飼育下での繁殖を図るために行った血の出るような努力、私は、センターの人々のこれらの仕事を身に泌みて実感して来た。

それは、浮ついた口さきだけの自然保護論者や、結果だけを見て云々する人々には、到底理解し得ないほどのぎりぎりの仕事であった。正直言って、トキという種類を残すために、この仕事を成功させることは必要であったが、それよりも、このセンターの人々の努力にむくいるために、何とか成功させたい、という思いがいつも私の中にはあったように思う。

それだけに、座長の職を退いてからも、一日としてトキの経過を気にしない日はなかったのである。今、私の胸中を去来するのは、これだけの努力が、どうして実を結ばないのか、という、ぶつけようのない切なさである。そして、近辻さんたちの努力を思うにつけ、どうしても心にひっかかっているのは、これほどの重要なプロジェクトが、こうした人々の自己犠牲的な努力に、その多くを依存しているという現実である。なぜ、この人々をバックアップする強力な研究機関、実施機関が我国にはないのか、という疑問である。

従来から、野生鳥獣の保護増殖を専門に行う国立の機関の必要性は、機会あるごとに述べられて来たけれど、いまだに、その実現の見通しは暗い、という。

このたびの発表をききつつ、私は、あらためてその推進を心からねがわずにはられないのである――。

## 調査・研究のための助成金獲得法

福田道雄

調査研究を進めるに当って、欠かせないもののなかで、才能と努力は自分で解決するものとして、金と時間の確保が重要な問題となる。時間については、やはり各自がそれぞれの立場で工夫するしかない。そして最後に残された金、即ち資金について今回特集を組んでみた。

現在、鳥が関係した調査研究にさまざまな形で助成金（賞を含む）の公募がある。まず、それらを以下に列記する（①助成対象、②助成内容、③応募締切月）。

### 【応募に制限がないもの】

朝日学術奨励金（〒104 東京都中央区築地5-3-2 朝日新聞東京本社企画部内「朝日学術奨励金」係）①独創的な研究で研究費に恵まれない研究者の個人またはグループ、②数件に総額1,000万円、③2月

鹿島学術振興財団研究助成（〒107 東京都港区赤坂6-5-13 財団法人鹿島学術振興財団）①都市・居住環境の整備および国土資源の有効利用等に関する学術研究を行う個人またはグループ、②1件300～1,000万円、③12月

科学研究費補助金一奨励研究B（〒100 東京都千代田区霞ヶ関3-2-2 文部省学術国際局研究助成課）①科学研究の助成・奨励、②1件30万円まで、③3月

三菱財団自然科学研究助成（〒100 東京都千代田区丸の内2-5-2 財団法人三菱財団）①自然科学の基礎分野における重要かつ独創的な研究に従事しているグループ、②1件2,000万円以内、1年を原則とし、継続は毎年選考、③5月

日本生命財団研究助成（〒542 大阪市南区南船場4-2-4 日本生命御堂筋ビル日本生命財団研究助成部）①人間活動と環境保全との調和に関する研究、②助成総額8,000万円程度、10月から1年間、③5月

日産学術研究助成（〒104 東京都中央区銀座6-17-2 財団法人日産科学振興財団）①1～3年を要する環境などの分野の基礎および応用研究を行おうとする個人かグループ、

②1件300～3,000万円、③11月

東レ科学技術研究助成（〒103 東京都中央区日本橋室町2-2 財団法人東レ科学振興会）①研究成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる研究、

②1件1,000万円程度、③11月

トヨタ財団研究コンクール（〒160 東京都新宿区西新宿2-1-1 三井ビル37F トヨタ財団研究コンクール係）①「身近な環境をみつめよう」のテーマに合う調査研究グループ、②研究奨励賞10数件に対して2年間の研究活動のための奨励金（金賞500万円、銀賞200万円）、③1月

トヨタ財団研究助成（同上研究助成係）

①「新しい人間社会の探求」を基本テーマとし、現代社会が抱える諸問題の発見と解決および将来の人間性豊かな社会構築を目指した研究、②総額2億2,000万円、11月から1～2年間、③5月

WWF保護事業助成（〒106 東京都港区麻布台2-4-5 39森ビル6F 世界野生生物基金日本委員会）①野生生物の保護に関する調査研究および野生生物の基礎的・学術的調査研究に関するもの、②10数～20件に総額2,000万円程度、数年間の継続も可、③11月

秩父宮記念学術賞（〒102 東京都千代田区麴町5-3-1 日本学術振興会総本部庶務課）①「山」に関する学術上顕著な業績、②賞状、賞金5万円、副賞10万円（朝日新聞社）、③10月

【応募資格に制限があるもの】

女性のためのエッソ研究奨励（〒107 東京都港区赤坂5-3-3 TBS会館 エッソ石油広報部研究助成係）①女性が主宰する研究グループによる自然科学等の研究，②10-15件に30-100万円，③2月

猿橋賞（〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217 女性科学者に明るい未来をの会）①自然科学の分野で顕著な業績を収めた女性科学者，②表彰，副賞30万円，③11月

下中科学研究助成（〒102 東京都千代田区三番町5 三番町Kビル 平凡社内 下中記念財団事務局）①小・中・高の教師（教育センター・養護学校等を含む）の教育のための個人または共同研究，②1件15万円で30件，③12月

【調査研究の地域に制限があるもの】

沖縄研究奨励賞（〒100 東京都千代田区霞が関3-6-15 グローリアビル 財団法人沖縄協会）①沖縄を対象とした自然科学等の研究者またはグループ，②賞状，記念品，副賞50万円，③9月

大阪科学賞（〒550 大阪市西区靱木町1-8-4 大阪科学技術センター）①理学，生物学，農学等における科学・技術の発展に寄与した研究で，大阪を中心とした地域で行われたもの，②表彰，副賞50万円，奨励金250万円，③6月

東急環境浄化財団研究助成（〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14 東急環境浄化財団）①多摩川およびその流域の環境浄化に関する研究，②総額約5,000万円，学術研究と一般研究は別個に選考，③1月

これらは最近の数年間に，科学雑誌，生物学系学会誌，新聞などで公募されたものの一部である。応募される場合は必ず内容を連絡先に確認して欲しい。なお，大学や研究所の関係者のみを対象としたものは，今回のリストから除いた。筆者の知る限りでは，鳥をテーマとして助成金を獲得した例は，大学関係者の科学研究費（文部省）以外では非常に少ない。それだけに大いに応募して，この分野を開拓して欲しい。

手軽に応募できるという点からは，個人で少額（100万円以下）のものが都合いいとみられる。しかし，そのようなタイプのもは，少ないのが現状である。すでにテーマを持っている場合は，助成を獲得するのに説得力のあるアプローチを工夫することが大切だと考えられる。一方，助成金によって何かの調査研究をやってみたいならば，いかに魅力的なテーマを見つけ出すかということが重要である。

特定地域内でのテーマであれば，地元新聞社や関係企業からも，あるテーマに限って助成があったことがある。また異変（たとえば鳥の大量死や鳥による作物の被害など）と関係して，県や市などから経費が出たこともある。さらに何かの記念事業や新規事業と関係して助成がある場合もある。いずれの場合にしても積極的に担当者に訴えることであり，また関心を持たすことができるだけの資料を備えておく必要がある。助成金をもらうと，さまざまな制約ができて嫌だという人もいる。しかし，筆者の体験では，助成を受けまとめあげねばならないため，かえってその期間それなりに集中した調査ができたということもあった。

最近，助成財団資料センター設立が検討されている。その趣意書によれば，このセンターは「助成型財団等に関する資料・文献等の図書館としての性格」や「助成する側と助成を求める側の情報交流の場としての性格」などを持つとされている。これらが実現されたならば，今後は助成がもっと身近なものとなると思われる。なお，助成は調査研究費以外に会議・研究会

の開催や出席の経費、研修の経費、出版や資料作成の経費についてもなされている。

最後に鳥をテーマとして、助成を受けて調査研究した例を紹介してもらった。

### ＜助成例＞

日本自転車振興会助成 杉森文夫

この振興会は、「私たちの自然」や「野鳥」誌の出版助成をすることで知られておられる方も少なくないと思うが、ここの研究助成は、「文教その他の公益の増進」の項の「公害防止及び自然環境の保護に関する調査研究及び啓蒙普及」と明示されている。

私たちは、「ドバト害防除に関する基礎的研究」（代表山踏芳磨）で、単年ごとに3ヶ年続けて申請し、3ヶ年で約800万円（昭和51-53年度）の助成を受けることができた。申請に当っては、①民法第34条の規定に基づく法人であること、②補助率が50%であること、など問題もあるが、研究企画が助成目的に合致し、研究資金が足りないが大規模に実施する必要性があるならば、ある法人が核となり、申請できれば理想である。当時、公益一課の担当者は、年間の助成金額が500万円を越えることを強調していた。しかし、研究費としてそれだけ準備できず、減額した記憶がある。

報告は、会計報告と事業報告があり、所定の用紙にそれぞれ記入し、経理さえきちっと整理されておれば、基本的に問題がないと思われる。私たちは、3年目に印刷費もつき、100頁程の報告書を共同研究をした日本配合飼料社中村文夫氏、東京農工大学久米宗男氏、平塚博物館浜口哲一氏らと共に出版した。

WWF保護事業助成 福田道雄

世界野生生物基金日本委員会（WWF J）は日本国内での保護事業として、毎年各種の団体やグループに助成を行っている。鳥が関係したプロジェクトでは、他の助成団体から抜きん出て多くの助成がなされてきている。今まで助成を受けた調査研究はトキ、ヤンバ

ルクイナ、タンチョウ、ツル類、ノグチゲラ、ハクチョウ類、ガン類、クマタカ、イヌワシ、オジロワシ、オオワシ、シマフクロウ、猛禽類、カンムリウミスズメ、ミズナギドリ類、伊豆諸島の鳥類、南西諸島の鳥類、帰化鳥類、標識調査などに関したもので、非常に多方面にわたっている。この助成の選考に当っては、対象の現状の把握と保護に力点があることはいうまでもない。何年間で継続できる場合もあるようだが、単年度の助成額は100万円以下のものが多い。

1981年度（4月-3月）「カワウの生態研究—コロニーの比較調査」で80万円（総経費約100万円）の助成を受けた。調査は上野動物園職員3名のグループで行い、青森、東京、愛知を中心に全国8か所を調査地とした。このため調査費用のほとんどは交通費であった。11月に助成申請書を提出し、翌年2月に交付決定があり、2月末に助成金が送金されてきた。調査終了後の報告書のほかに、12月末までに中間報告と英文の調査概要を提出した。報告書とともに収支決算書を出す。支出については、実際の調査で必要となれば、かなり自由な運用が認められていた。

トヨタ財団「身近な環境をみつめよう」  
研究コンクール 唐沢孝一

従来の研究助成と異なるいくつかの特徴があげられる。まず、環境を広義に解し、自然・文化・社会（歴史）などあらゆる分野を対象にしている。応募課題も子供の教育の場としての移転跡地利用、老人の生きがいの問題、生物と環境問題など多様だ。同じ土俵上の研究でないので、評価も単なる学問的成果では測れない。学者の研究とは視点の異なるもの、地域社会との関係を重視した内容が要求されている。また、応募チームはコンクールによって選考され、さらに次の段階の研究助成が

得られる仕組みになっている。研究奨励候補20件、各50万円助成、半年後に12件の研究奨励賞各400～500万円助成、2年の研究成果により1～2件の研究奨励特別賞に絞られ、500～1,000万円及び賞金100万円が授与される。2年半以上の長期にわたる研究を持続させるための研究体制、民主的な組織運営、研究の発展性なども重要である。地域社会に生

活する市民が研究に参加し、問題意識を高め、さらに長期にわたり市民運動として研究の輪が広がることが要求されている。研究のフィールドに審査員が直接インタビューに来たり、報告書、会計報告もきちんと提出せねばならない。2年に一度募集があり、第4回コンクールは、本年10月15日より公募される予定である。

## DISCUSSION Discussion

### ニュース16号の二つの記事に反論する

森 岡 弘 之

最初に取り上げるのは、浦野栄一郎氏の「大会プログラムの事前送付を」である。確かに、大会プログラムと講演要旨は一時会員全員に送っていたが、現在は大会参加者にだけ配布している。その理由は、大会に参加しない人も含めて全員にプログラムを事前配布することに金を使うより、講演要旨を「鳥」に印刷する方がよいと判断したのである。したがって、会員の多くが講演要旨の印刷より会員全員に対するプログラムの事前配布を望むのなら、もとの状態に戻してもよい。また、会費の値上げも承知のうえで、両方とも望むのなら、それも可能である。しかし、一定の資金の枠内で何かやろうとするのであれば、どうするのが効果的かを考えるのは当然であろう。

ところが、浦野氏の発想は、生態学会や動物行動学会がやっているのに何故鳥学会はやっていないのか、というきわめて皮相的で単純なものである。プログラムを会員全員に事前配布すれば大会参加者は多少増えるとしても、はたして投資に見合うほど増えるだろうか。私の見る限り、大会の参加者の大部分は常連の方で、個々のプログラムより参加に意義を認めているのであり、大会参加者は年々増えている。それにプログラムも講演要旨も作っていないわけではなく、大会参加者には配布しているので、もし必要ならばプログラムだけ申し込むのも一案である。しかし、他の学会のことはともかく、プログラムを全員に配布することが、浦野氏が主張するほど必要なこととは思われないし、そのことだけで大会参加者が大幅に増えることもないと思う。

次に取り上げるのは、三重大会のシンポジウムの資料として行われた大会世話人によるアンケート調査である。特に、質問5の「最近10年間の総論文数（解答者全員の合計）を見ると、「鳥」（20篇）に対し、他の学会誌・報告書（194篇）への投稿が多いことがわかった」という部分である。はたしてこれが実状を反映しているであろうか。確かに「鳥」に対する投稿は多くない。しかし、「鳥」以外に国内で鳥学の論文を出版してくれる雑誌は、山階鳥研報、生態学会誌、生理生態、動雑、動物学彙報、J. Ethology その他があるが、山階鳥研報はさておき、他の雑誌のどれを見ても、鳥学の論文が活発に出ているとはとうてい思えない。

確かに、アンケートの結果としてはニュースに書かれたとおりであったであろうし、大会世話人がアンケートの結果を操作する意図があったとも思えないが、アンケートはやり方によって結果がどうにでもなることはしばしば経験するところだ。要するに、このアンケートの結果は、論文ならざるものも論文と教え、タイプ印刷の報告書も学会誌の論文も一緒くたにした結果であろう。アンケートは公正かつ客観的と考えられがちだが、質問次第でまったく反対の結論になることもある。このアンケートの結果は「鳥」の編集にあたっている私としては、誤解されやすく、はなはだ迷惑なものであった。

---

## Information

---

### 新刊書ニュース

#### 続・ICBPの専門書

ICBPから専門書シリーズが新たに出版された(本誌16号7頁参照)。

Conservation of Tropical Forest Birds.  
A.W. Diamonds & T.E. Lovejoy (eds). 324  
pp. (ICBP Technical Publication No. 4)  
18.50 ポンド (送料込み) (= 約 5,200円)。

これはICBPの第18回世界会議の時に催されたシンポジウムの記録。21論文を収録し、世界各地の熱帯雨林に生息する鳥類の現状と保護のための課題を論じています。

上記の本と前号で紹介した本について、学会でまとめて注文しますのでハガキで下記へ申し込んで下さい(代金後払い)。

(〒274) 船橋市三山2-2-1 東邦大学  
理学部生物学教室 長谷川 博 宛

## 〃〃 日本鳥学会の刊行物出版計画について 〃〃

鳥学会は、鳥学の発展および鳥類保護への学術的貢献を目的として、会誌のほかにも数多くの学術刊行物を出版してきた。現在、鳥学会によって編集準備・検討がすすめられているものについて紹介したい。

### 1. 「鳥学用語集」

日本動物学会など他の多くの学会で、学術用語集が編集され、近々、出版される。鳥学会は独自の学術用語群をかかえているが、他の学問分野とのかかわりも深く、とくに近年その傾向が強まっている。こうした状況に対応する鳥学用語集が学会内外から望まれていた。本会は1986年末出版を目途にして編集にとりかかる。この用語集を土台にして、将来、「鳥学事典」を編集・出版する計画である。

### 2. 「日本鳥類目録、第6版」

1974年に出版された「日本鳥類目録、改訂第5版」は残部僅少となり近いうちに入手困難になると思われる(希望者は早急に本会事務局に申込む。代金8,000円は郵便振替で本会の口座へ送金)。第5版出版以後、研究が進展し新知見も蓄積されてきた。そのため、増補再版するよりは第6版を編集するほうがよいと判断、編集委員会がつくられ、編集方針の検討がはじめられた。

### 3. 会誌「鳥」の総索引

「鳥」の昔の号にどのような論文・記事がのっているのか知りたいと思う人が、それらの号を持っていない比較的若い世代の会員のなかにいるだろう。そうした希望にそうように、会誌第1号から100号を区切りとして、索引(著者索引ほか)の編集がすすめられてきた。しかし、会誌名が「鳥」から「日本鳥学会誌」へと変更される方向なので(評議員会では議決)、誌名変更が決定された段階で、その号までをまとめて索引づくりをする方針に修正された。出版方法は未定。

---

## Meeting

---

鳥学会例会 1984年10月27日(土) 上野  
動物園ホール

【講演】鳥類研究におけるマイコンの利用：  
マイコンを使って鳥の声を分析する(高良真  
一氏)、鳥の渡り活動を記録するシステム  
(中村司氏)

高良さんは、ガンの声を分析しておられる。いわゆる声紋を描かせる機械として、ソナグラムがあるが、誰でも手軽に使える代物ではない。そこで、テープレコーダにとったガンの声を、「アナログからデジタルに変換し、そのデジタル・データの組をフーリエ変換して」、マイコンに声紋を描かせた。ガンの声は、単純な倍音で構成されているので、鳴管

だけで発声しているらしい。声の波長と鳴管の長さの関係などから、発声法を予測できるかも知れない。デジタル・データの強みで、未録音の「声」を、既存のデータから合成することも計画中とか。はっきりしていて雑音のない、使える声の録音が一番むずかしい、とのことだった。

中村さんは、長年、ホオジロ科の鳥の渡り衝動の発現機構を研究されておられる。その長い研究史の中で、少しずつ便利な機械を導入されてきて、今は、2台のマイコンを使って、データの記録と処理を行なわせている様子を語られた。マイコンの利用もさることながら、研究の発展にともなって工夫を重ねる様が、中村研究史そのものを映し出して、一同の興味をそそった。研究の進展と道具の開発が、二人三脚の関係にあることを、改めて思った。

短報3題：1)筑波・農研センター・松岡茂氏、音声分析装置(スペクトラム・アナライザー)を、2)東大・農、石田健氏、野外で使えるハンドヘルドコンピュータの紹介、3)山階鳥研・茂田良光氏、福岡でキタヤナギムシクイ? 発見の報告。

鳥学会例会 1985年1月12日(土) 東京大学農学部

【講演】'84大会講演会から:イソシギの社会—ディスプレイをめぐる(中村登流氏)、ネズミをくうフクロウ類(西村欣也氏、上原京氏) シギ・チドリ類のつがい関係は、実に多様である上に、条件によって変化するらしい。中村さんは、近縁種のマダライソシギが一妻多夫であることに注目して、イソシギに取り組まれた。つがい関係を探究するのきっかけとして、イソシギの派手なディスプレイには雄同士、雌同士の他、様々のシチュエーションがあり、経験豊かな中村さんにしても、また暗中模索中とのこと。一つの行動の意味に、何かの時ハッと気づくことがある、と、カワガラスのまばたきを例に話された。

西村さんと上原さんは、飼育下のフクロウ類に関する研究の結果を中心に話された。大きな野外ケージの実験で、フクロウがハタネズミをアカネズミよりもよく捕食すること。体の大きなフクロウの方が、トラフズクより基礎代謝量が少なかったこと。また、トラフズクのペリット分析の結果などであった。初めに、フクロウ類全体の解説があり、一般参加者も楽しめたことだろう。(石田健)

《原稿募集》 BIRD N・E・W・S, 情報コーナー, Discussionへの投稿をお待っています。20字詰で、次号締切りは9月末日です。

## 世界の動物分類と飼育

全10巻

① 霊長目 ② 食肉目 ③ 長鼻目 ④ 奇蹄目+管齧目+ハイラックス目+海牛目 ⑤ 偶蹄目I ⑥ 偶蹄目II ⑦ 偶蹄目III ⑧ コウノトリ目+フラミンゴ目 ⑨ ガンカモ目 ⑩ キジ目+ツル目 ●=既刊

監修【鳥類】=黒田長久・森岡弘之 挿図=藪内正幸

### ガンカモ目

2200円  
B5判160頁

- サケビドリ科2属3種、ガンカモ科3亜科43属147種の全種を解説。
- クロエリサケビドリの飼育 コブハクチョウの飼育 カリガネの繁殖 カナダガンの飼育 ツクシガモの繁殖 マガモの繁殖等

### コウノトリ目 フラミンゴ目

2900円  
B5判166頁

- サギ科15属62種、シュモクドリ科1属1種 コウノトリ科6属17種、ハシビロコウ科1属1種、トキ科13属28種、フラミンゴ科3属5種の全種を解説。
- 各科ごとに貴重な飼育記録を掲載。

発行=財団法人 東京動物園協会 〒110 東京都台東区上野公園9-83上野動物園内 発売=どうぶつ社

## 例会のお知らせ

1985年9月28日(土)午後2時開演～4時ごろまで

講演：日本の化石鳥類 小野慶一氏(国立科学博物館)

日本から産出する現生鳥類化石の概要と、現在は見られない骨歯鳥類など日本産鳥類化石の話題についての講演していただきます。〈短報は当日も受け付けます〉

会場：東京大学農学部2号館(教室番号は当日入口に表示します)

※ やむをえず会場・講演内容などに変更が生じた場合、9月25～28日の間テレフォンスerviceしています。→(電話番号)0484・62・7141

## 広告掲載と名簿使用のご注意

ご覧のように本号から広告を載せることになりました。以前から企画はあったのですが、のびのびになっていたものです。掲載の趣旨は読者に良い情報を伝えるためと、本誌増ページのための収入を得るためです。ご了承ください。

ところで最近、あきらかに本会の名簿を無断使用したと思われる書籍のダイレクトメールがありました。名簿はあくまで研究用に作っているもので、商業使用の場合は事務局へ申し込んで所定の使用料を払っていただいております。よろしくをお願いします。

### <「現代の鳥類学」第2刷/>

— 注文は学会事務局へ —

日本鳥学会創立70周年記念の出版「現代の鳥類学」(森岡・中村・樋口編、朝倉書店発行)は好評のうちに2刷目に入りました。学会を通してご購入いただければ、わずかですが学会の台所を潤すことになります。

価格 3,800円(送料不要)

### <事務局への連絡にご注意ください>

森岡氏が7～9月の間、海外へ出張しますので事務的な処理が遅れると思われます。悪しからずご了承ください。

### 前号(No.16)の訂正

- p.1 国際鳥学会議についての記事で、関係資料申込みにて先にタイプミスがありました。下記が正しいあて先です。Dr. Henri Ouellet, Secretary General, XIX Congressus Internationalis Ornithologicus, National Museum of Natural Sciences, Ottawa, Ontario K1A 0M8 Canada
- p.4 バネ秤の入手先のうち、B.T.Oでは5g～20kgまで扱っているとのこと。

ニュース編集部 〒112 東京都文京区大塚5-40-10 日本大学豊山高校 川内博宛

## 編集後記

8ページはあまりにも少ない！ 編集子の願いは通り、広告掲載で収入を得る条件のもとで10ページになることになりました。しかし本号は今までの超過ページ分の相殺のため減ページ。謝礼なしで玉稿をいただいている執筆者に感謝いたします。(川内)

## 鳥学ニュース No. 17

1985年6月20日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館分館内 (電話) 03(364)2311 (振替) 東京1-6599

発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文英社印刷